

# 乳幼児期の移行対象と指しゃぶりに関する調査研究

## A Study on Transitional Objects and Thumb Sucking in Early Childhood

(2007年3月31日受理)

富田 昌平

Shohei Tomita

Key words : 移行対象, 指しゃぶり, 家庭, 乳幼児期

### 要 約

本研究では、乳幼児期における移行対象（毛布やタオル、ぬいぐるみなどへの愛着）とその先駆物としての指しゃぶりの出現の実態について、3歳から6歳の子どもを持つ保護者261名への質問紙調査をもとに検討した。調査の結果、①移行対象の出現率は31%、指しゃぶりの出現率は24%であり、そのうち両者が同時に現れたケースは9%であった。②移行対象と指しゃぶりは一人っ子、長子、末っ子において同程度に出現し、中間子において少なかった。③指しゃぶりは生後6ヶ月以前に出現し、生後6ヶ月から36ヶ月でピークを迎えるのに対し、移行対象はより遅れて生後24ヶ月から60ヶ月がピークであった。また、ぬいぐるみや人形などの二次性移行対象は、毛布やタオルなどの一次性移行対象よりも出現が遅かった。④移行対象と指しゃぶりは入出眠時に多く必要とされ、その他テレビ視聴時や退屈な時に必要とされた。それらは子どもを落ち着かせ、安心感を与えると保護者に解釈されていた。⑤対応については無理にやめさせようとした者は少なく、多くはいつか子ども自身で手放すだろうという予測の元に、自然ななりゆきに任せていた。

### 問 題 と 目 的

#### 1. 移行対象とは

「私が幼い頃から愛着を持ち続けていたものは、柔らかい布のようなものでした。肌に触れるとひんやりしてとても気持ちよかったのを覚えています。どこへ行くにも、いつでもその布がないと泣いていたように思います。母が「もうたくさん破れたから、そろそろ捨てたほうがいいのかもね」と言ったことも、はっきりと覚えています。それでも私は、肌触りのいい柔らかい布が大好きだったので、ずっともっていたくて、母に見つからないように隠したりしていました。

私と柔らかい布はいつも一緒に当たり前だったので、離れることはないと思っていたのに、やっぱり別れの日はやってきました。いつもあるはずのあの柔らかい布が

なくて、私は泣きました。かすかに残っている幼い頃の記憶の中でも、この思い出はすぐに思い出せます。……私が生まれた頃の写真をみると、頭を囲むようにその布が私を包んでくれています。布がなくなって何年もたつけれど、今でもひんやりとした柔らかい布の肌触りを思い出せます。それだけ好きだったのだと思います。」

(学生のレポート (2001) より)

赤ん坊やよちよち歩きの子どもは、しばしば毛布やタオル、ぬいぐるみなどに強い愛着を示す。食事をするときも寝るときも、遊ぶときも外に出かけるときも、絶えず離さずに持ち歩いたりする。とりわけ夜眠るときなどは、それがないと落ち着いて眠ることができず、それを与えられることでようやく眠りにつくことができる、といったこともしばしばである。

乳幼児によるこうした対象物への特別な愛着の現象を、イギリスの小児精神科医Winnicott (1953, 1971) は“移行対象” (transitional objects) と名付けた。それは、就寝時や母親の不在、旅行時、あるいは未知の人物や環境との遭遇といった乳幼児にとってストレスフルな状況にあって、母親の乳房や母親そのものを象徴的に代理し、その子の不安や緊張を癒し、落ち着かせ、慰めるものとして機能するという(遠藤, 1989)。たしかに、漫画『ピーナッツ』に登場するライナスや、絵本『ジェインのもうふ』に登場するジェインがまさにそうであるように、毛布の肌触りや温もりは母親のそれを象徴的に代理し、そのことが子ども自身を落ち着かせる働きを担っているようである。

また、Winnicottによると、一般的に母親は、乳児のミルクが欲しいという欲求に対して、即座に乳房を差し出すなど、最初のうちは乳児の欲求に完全に適応しているが、成長するに従ってその適応を不完全なものにしていく。そして、こうした母親の関わり方を通して、乳児は“母親は自分の一部である”という内的心的現実、すなわち“錯覚” (illusion) 状態から、“母親は自分と独立した存在である”という“脱錯覚” (disillusion) を体験し、次第に外的客観的現実を受容していくようになるという。この移行過程において、主観と客観の間に位置し、乳児の精神生活を支える場として、Winnicottは“中間領域” (intermediate area) を仮定している。そして、この中間領域において、両世界の橋渡しをする機能を担うのが移行対象であり、これにより脱錯覚という、ある種の喪失体験に伴う多大な不安を低減することができ、よりスムーズな移行が可能になるという(池内・藤原, 2004)。

このWinnicott理論で興味深いことは、先に述べた“中間領域”を単に発達過程上の一時点でのみの問題として位置づけるのではなく、人間の一生を通じて残存し、遊ぶことや芸術、宗教などの文化的経験として発展、保持され、人間の健全な精神生活を支えるものとして位置づけている点にある。その意味で、この“移行対象”現象の追究は、乳幼児の行動や心理、発達を理解する上で役立つばかりでなく、人間の生涯にわたる健全な精神生活について考える上でも役立つものと思われる。

## 2. 移行対象の出現率

実証的研究では、多くの場合、どの程度の子どもがそれを有しているかといった出現率が問題とされる。確かに、移行対象現象そのものの一般性を考える上でも、どの程度の子どもがそれを有しているのかは気になるところである。アメリカ、イギリス、スウェーデン、ニュージーランドなど欧米圏の研究によると、およそ60%から80%の範囲の出現率が示されている(遠藤, 1989; Litt, 1981など)。このように、欧米圏において移行対象はかなり一般的な現象なのである。

Winnicottは移行対象の出現の基盤として、母子間の“ほどよい” (good-enough) 関係の存在を指摘している。先に述べたように、最初の頃、母親は子どもの欲求に対してきわめて正確に適応するが、子どもが成長するに従って徐々にその適応を減らしていき、適度な欲求不満を子どもに生じさせるようになる。これはごく健全な母親の変化であり、Winnicottは、移行対象はこうした母と子の“ほどよい”関係を基盤として初めて出現し、きわめて健全な発達の発露として位置づけている。先ほどの欧米圏における高い出現率は、こうしたWinnicott理論とも合致するものである。

しかしその後、以前よりも広い国や地域で調査が行われるに従って、移行対象出現の有無を健全な発達の一指標とするようなWinnicott理論に基づく考え方は、修正を迫られている。例えば、Gaddini & Gaddini (1970) は、イタリアの都市部と農村部とで移行対象の出現率が異なることを見出している(都市部61.5%、農村部4.9%)。また、Hong & Townes (1976) は、アメリカ人における出現率54.0%に対し、韓国人における出現率は18.0%に過ぎなかったことを報告している(アメリカ在住の韓国人は34.0%)。わが国においては、藤井 (1985) の31.1% (N=415)、遠藤 (1990) の38.0% (N=951)、井原・江・庄司 (1997) の31.7% (N=736) という研究結果が示されている。こうした結果を受けて、現在では、移行対象の出現には文化による伝統的な育児法の違い(例えば、添い寝か独り寝か)や子どもに対する発達期待の違いなど、子育てにまつわる様々な文化的要因が影響することが指摘されている。

### 3. 移行対象の出現の背景

移行対象の出現を生育過程上の諸問題との関連から検討する研究も数多く行われている。Stevenson (1954) は、幼少期に移行対象を持たなかった子どもほど依存傾向が強かったことを報告している。Horton, Louy, & Coppolillo (1974) は、健常者の約93%には幼少時、何らかの移行対象があったのに対し、人格障害者の約84%には全く存在しなかったことを明らかにしている。Provence & Ritvo (1961) は、施設収容児には移行対象の使用がほとんどないという研究結果を得ており、それは母親的な存在の欠如が原因であろうと考察している。藤井 (1985) は、移行対象出現の有無と母子関係における心理的密着度との関連性について調べた結果、年齢が低い群 (平均月齢13.2ヵ月) では、母子間の心理的密着度が弱い方が移行対象が出現しやすいのに対して、年齢が高い群 (平均月齢35.9ヵ月) では、母子間の心理的密着度が強い方が移行対象が出現しやすいことを明らかにしている。また、遠藤 (1990) は、母乳哺育でそれが長期にわたる場合や母親の添い寝期間が長い場合、また母親の育児に対する葛藤が少ない場合、移行対象があまり出現しないことを明らかにしている。さらに、遠藤 (1991) は、移行対象は一人っ子により多く見られ、移行対象の出現の有無、種類はきょうだいで一致しやすいことを明らかにしている。

以上のような研究結果をもとに、遠藤 (1989) は、移行対象の出現には、母親との間の“ほどよい”関係の中で母親についての内的表象を獲得することが前提としてあるが、だからといって、母親との間に健全な関係を築いた子どもすべてが移行対象を出現させるかといえばそうではなく、子どもは時に状況に応じて、適応のすべとして移行対象を使用しうるのだとまとめている。そして、移行対象が必要とされる状況として、子どもにとってのストレスが相対的に多かったり、母性的な関わりの減少が急速であったり、母親の養育行動や状況の変化が大きかったりした場合に、子どもは移行対象を出現させ、使用すると考察している。

### 4. 移行対象の種類

ところで、移行対象に関する実証的研究を行うにあたっては、その基準にも触れておかねばなるまい。移行

対象の種類は幅広く、どこまでをそう呼ぶかは研究者によって異なるが、主なものとしては毛布、布団、タオル、タオルケット、ぬいぐるみ、人形があげられ、その他に、枕、ハンカチ、裏地、フリル、リボン、お母さんのネグリジェ、おんぶひも、クッション、パジャマなどがあげられる (井原, 1996)。移行対象の概念を提唱したWinnicott自身は、当初かなり多様な対象を想定していた。彼は、毛布、タオル、ぬいぐるみといった具体的に手で触れうる対象の他に、メロディー、子守唄、喃語、儀式的な行動といった具体的でないもの、無形のもの、ありとあらゆるものを移行対象に含めていたという (遠藤, 1989)。しかし、その後の研究では、ある程度一定の同定基準が与えられている。

例えば、Gaddini & Gaddini (1970) は、手や指といった乳幼児自身の身体の一部や母親の身体の一部、おしゃぶり、哺乳瓶等を移行対象から除外し、これらを移行対象の前身という意味から“先駆物” (precursors) と呼び、移行対象とは明確に区別している。Busch, Nagera, McKnight, & Pezzarossi (1973) もまた、手や指をしゃぶるなど口唇愛的な性格を持つ対象を、移行対象から除外している。Hong (1978) は、移行対象をその種類と出現時期から、“移行対象等価物”、“一次移行対象”、“二次移行対象”の3つに分類している。移行対象等価物とは、先の先駆物に該当するものを指す。一次移行対象とは、毛布やタオルなど、主に生後6ヶ月頃から1歳頃までに愛着が寄せられる対象を指す。二次移行対象とは、ぬいぐるみや人形など、主に2~3歳頃から愛着が寄せられる対象を指す。後者の対象には人格的な特性が備わっており、遊びの文脈で使用されることが多い。このことから、子どもは一次移行対象には感覚的な満足を求めているのに対して、二次移行対象には対人的な満足を求めているものと推察される。

以上のように、現在では指しゃぶりは移行対象から除外して考える見方が一般的であるものの、その一方で、これらは似通った特性をもち、似通った場面で出現することも事実である。出現時期は生後1~3ヵ月頃に始まり、6ヵ月頃からピークというように、毛布やぬいぐるみよりも早くに出現するが (村瀬, 2001)、毛布やぬいぐるみと同様にしばしば子ども自身の緊張を和らげ安心感を与えるはたらきを持つ。また、指しゃぶりを習癖と

して持つ子どもは、毛布やタオルやぬいぐるみといった対象にも強い愛着を示しやすいという報告もある(村瀬, 2001)。本研究では先行研究と同様に、指しゃぶりを“先駆物”として移行対象から除外する立場をとるが、移行対象との特性面での共通性や現象的な近接性を考え、指しゃぶりについても併せて検討することにする。

## 5. 本研究の問題と目的

本研究では、乳幼児期の移行対象と指しゃぶりについて、3歳から6歳の子どもをもつ保護者を対象に質問紙調査を行い、そこで得られた資料をもとに、その乳幼児期における出現とその背景、および保護者による現象の受容・理解について検討することを目的とする。

これまでの先行研究を振り返ると、移行対象と指しゃぶりについての実証的な検討はもう十分であるようにも思われる。実際、本研究がこれから示していく資料は、ある意味では先行研究がこれまで示してきたことの繰り返しである。しかし、移行対象と指しゃぶりという現象の日常性や実践への提言可能性を考えると、その資料の提出はたとえ繰り返しであるにせよ、し過ぎるということはないであろう。

本研究で特に関心を寄せることは、第一に、移行対象および指しゃぶりの出現率と出現時期、その出現の背景である。この点については、すでに先行研究の中心的な関心事として、これまで数多くの証拠が提供されてきたが、本研究ではその点を改めて問い直すとともに確認

していく。加えて、先行研究ではあまり触れられてこなかった、移行対象とその先駆物としての指しゃぶりという2つの組み合わせの出現パターンについても検討していく。第二に、今回のケースのように相対的に頻繁に認められるもの、それを持つ者と持たない者(あるいは、する者としない者)とに二分されるような現象に対して、保護者はどのように受け止め、理解しているのかという点についても、自由記述の内容をもとに検討していく。現象に対する世間一般の理解や態度に関しては、先行研究においても別段見過ごされてきたわけではないが、親によるその具体的な記述の紹介はあまりなされてこなかった。本研究で示す保護者の自由記述は、彼らの受容・理解のあり方について知る上で役立つであろう。

## 方 法

### 1. 被調査児

山口県S市、U市内の私立保育園2園に在籍する3歳から6歳の幼児261名が対象であった(回答はその保護者)。月齢と性別の分布はTable 1の通りである。きょうだい構成は、一人っ子、長子、中間子、末っ子A、末っ子Bの5つに分類した。内訳はTable 2の通りである。末っ子を2つに分類した理由は、同じ末っ子でも3人以上のきょうだいの末っ子と2人きょうだいの末っ子とでは、きょうだい間の競争や地位の質が異なると判断したためである。

Table 1 被調査児の月齢、性別の分布

	月 齢						
	36~47	48~53	54~59	60~65	66~71	72~77	78~83
男児	8	21	22	21	22	17	11
女児	9	24	23	21	26	26	10
合計	17	45	45	42	48	43	21

Table 2 被調査児のきょうだい構成の分布

構成	人数	内 訳
一人っ子	38	一人っ子 (38)
長子	89	3人きょうだいの1番目 (14), 2人きょうだいの1番目 (75)
中間子	27	4人きょうだいの2番目 (2), 4人きょうだいの3番目 (1), 3人きょうだいの2番目 (24)
末っ子A	22	4人きょうだいの4番目 (1), 3人きょうだいの3番目 (21)
末っ子B	85	2人きょうだいの2番目 (85)

## 2. 手続き

質問紙は保育園のクラス担任を通して園児の保護者に配布し、1週間後に回収した。調査時期は2002年11月から12月であった。

## 3. 質問項目

質問1 お子さんの年齢は？

質問2 お子さんの性別は？

質問3 お子さんは何人きょうだいの何番目ですか？

質問4 お子さんは何か決まったもの（例えば、毛布・タオル・まくら・ぬいぐるみなど）を、いつも手放さずにかけていたり、特に好んで使っていたり、特に大事にしていますか？あるいは指しゃぶりをしていますか？（はい／今はないが過去にあった／いいえ）

質問5 「はい」と答えられた方は、その発生時のお子さんの年齢は？

質問6 「今はないが過去にあった」と答えられた方は、その発生時のお子さんの年齢は？

質問7 その対象はどのようなものでしたか？該当するものに○をしてください（1毛布／2布団／3ぬいぐるみ／4まくら／5シーツ／6タオル／7ミニカー／8ハンカチ／9人形／10ロボット／11指しゃぶり／12その他）

質問8 その対象（もしくは指しゃぶり）とお子さんとの関係について、できるだけ詳しく教えてください（例：お子さんはその対象をいつどのようなときに必要としていますか？その対象を持っている時、持っていない時の様子？その対象に対して家族はどのように対応していますか？）

質問9 お子さんはなぜその対象を持つようになった（もしくは指しゃぶりをするようになった）と思いますか？思い浮かぶ理由を何でも結構ですので教えてください。

(30.2%)、過去に持っていた者は37名(14.1%)であった。男女別で見ると、男児122名のうち57名(46.7%)、女児139名のうち59名(42.4%)が現在または過去に出現ありと回答しており、性別による違いは見られなかった。また、月齢ごとの回答にも差は見られなかった。次に、対象物の種類を次の5つに分類した。

①先駆物……指しゃぶり、おしゃぶり、耳たぶ、唇など、自己の身体の一部を愛着対象とした場合。

②先駆物＋一次性移行対象……先駆物以外に、以下に述べる一次性移行対象を愛着対象とした場合。

③一次性移行対象……毛布、タオル、シーツ、枕、ハンカチ、ガーゼなど、布地を愛着対象とした場合。

④一次性移行対象＋二次性移行対象……一次性移行対象以外に、以下に述べる二次性移行対象を愛着対象とした場合。

⑤二次性移行対象……ぬいぐるみ、人形、ミニカー、ロボット、アクセサリーなど、ぬいぐるみや玩具を愛着対象とした場合。

以上の分類をもとに、対象物ごとの出現状況をFigure 1に示した。Figure 1から明らかなように、指しゃぶり(すなわち先駆物)の出現率は①②を合わせると23.4%であり、移行対象の出現率は②③④⑤を合わせると30.3%であった。特に後者の結果は、藤井(1985)の31.1%、遠藤(1990)の38.0%、井原ら(1997)の31.7%という結果ともほぼ一致する結果となった。

さらに、きょうだい構成タイプ別の各対象物の出現状況の違いについて検討した。Figure 2に示す結果について、5(きょうだい構成)×2(出現の有無)の $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差が確認された( $\chi^2(4)=13.823$ ,  $p<.01$ )。移行対象と指しゃぶりは一人っ子、長

## 結果と考察

### 1. 出現率

移行対象(毛布、タオル、ぬいぐるみなど)と指しゃぶりの現在または過去における出現の有無を尋ねたところ、261名の被調査児のうち現在持っている者は79名

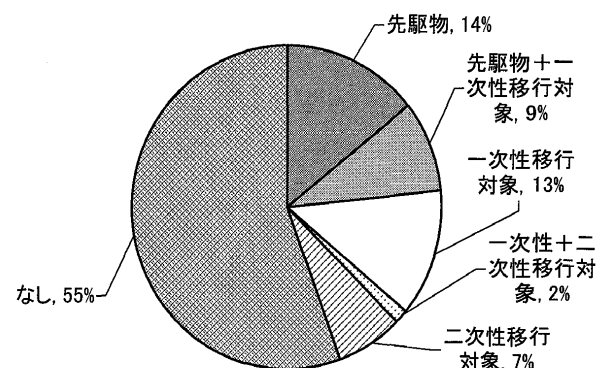


Figure 1 各対象物の出現率

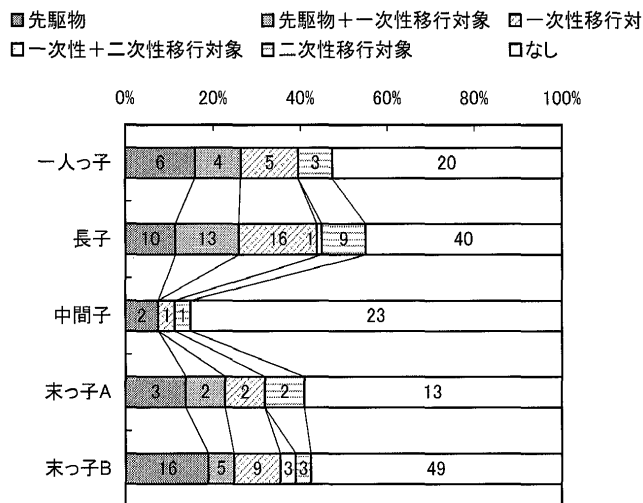


Figure 2 各対象物のきょうだい構成ごとの出現率

子、末っ子A、末っ子Bに比して、中間子において出現が少ない ( $p < .01$ ) という結果が示された。

この点については、遠藤 (1991) が興味深いデータを提供している。彼はきょうだい数が3人までの子どもを対象としたデータをもとに、出生順位による移行対象の出現率の違いについて検討したところ、一人っ子での出現率が他よりも高率となったこと、長子との出生間隔がより近接した次子の出現率が相対的に高くなることを報告している。また遠藤は先行研究をレビューする中で、母親のかかわりは第一子よりも第二子において減衰すること、第二子に対する母親のかかわりの減衰は性別の組み合わせによって異なり、姉を持つ妹の場合が最大で、兄を持つ妹がこれに次ぎ、第二子が男児の場合はほとんど生じないこと、きょうだい間の出生間隔が減衰に反映されることなどを報告している。

以上の結果について、遠藤は、出生順位やきょうだい数がこうだからこうだといった短絡的な議論は避け、より広く、母性的かかわりを中心とする環境側の外的要因と、子どもの気質などの内的要因が交差して生じる、子ども自身にとってのストレスの相対的多少を想定し、移行対象の必要の有無にはそれらが反映されると論じている。本研究も同様に、きょうだい構成の群間差をもって、だからこうだと直接的に論じることは避ける立場をとるが、しかし、中間子において移行対象と指しゃぶりの出現が低率であるという結果は、従来の結果とは異なる興味深い結果である。

仮に、先行研究の見解や一般的な言説に従えば、中間

子は最も母親のかかわりが減衰し、ストレスフルな立場にあるといえる。にもかかわらず、移行対象や指しゃぶりの出現が少ないということは、それ自体はやはり遠藤 (1989) が言うように、単に環境側の外的要因からなるストレスから生じるのではなく、子ども自身の必要に応じて生じるのだと解釈できる。ではなぜ、中間子において少ないのかと再度問われれば返答に困るが、少なくとも母親のかかわりの減衰を最有力とする出現仮説は、退けられるかもしれない。これらの点については今後の課題である。

## 2. 出現時期と出現期間

各対象物の出現時期と出現期間について明らかにするために、出現の開始から消失までの時期を尋ねた。この場合、すでに過去のものとなっているケースでは消失時期は特定できるが、現在継続中のケースでは消失時期が特定できないため、現時点での月齢を現在継続時期として入力した。次に、出生から83ヶ月までを6ヶ月ごとに区分した表に、各被調査児の開始から消失 (現在継続) までの期間を出現時期として1ずつ入力した。例えば、「6ヶ月から4歳2ヶ月まで」という回答の場合、6～11, 12～17, 18～23, 24～29, 30～35, 36～41, 42～47, 48～53のセルにそれぞれ1を入力した。また、仮に「4歳まで」とある場合、48～53のセルまで1を入力するのではなく、その前月までで入力した。

Table 3は各対象物の月齢区分ごとの出現状況を示したものである。このTableから、先駆物は他のタイプと比べて、生後0～5ヶ月という最初期に早くも出現し、1歳から1歳半頃が出現のピークであること、一次性移行対象は特に生後6ヶ月以降に見られ始め、2歳から2歳半月頃が出現のピークであること、二次性移行対象は特に1歳頃から見られ始め、3歳から3歳半頃、または5歳から5歳半頃が出現のピークであることがうかがえる。しかし、Table 3は単に各時期での出現頻度を算出したものに過ぎず、各時期で被調査児の数が異なることを考慮に入れていない。本研究の被調査児は3歳から6歳の幼児であるため、36～41ヶ月までは261名すべてが回答者であるが、それ以降回答者は随時減少していくことになる。各時点での被調査児数は42～47ヶ月258名、48～53ヶ月244名、54～59ヶ月199名、60～65ヶ月154名、

Table 3 各対象物の月齢区分ごとの出現状況

	月 齢													
	0~	6~	12~	18~	24~	30~	36~	42~	48~	54~	60~	66~	72~	78~
	5	11	17	23	29	35	41	47	53	59	65	71	77	83
先駆物	18	28	35	32	33	32	29	26	23	14	11	8	4	2
先駆物+一次性移行対象	3	11	19	20	21	22	21	20	20	15	9	7	4	2
一次性移行対象	1	8	21	24	30	29	28	27	25	18	14	8	4	2
一次性+二次性移行対象	0	2	4	4	4	4	4	4	3	2	2	1	0	0
二次性移行対象	0	2	4	5	7	8	9	7	6	4	7	6	5	1

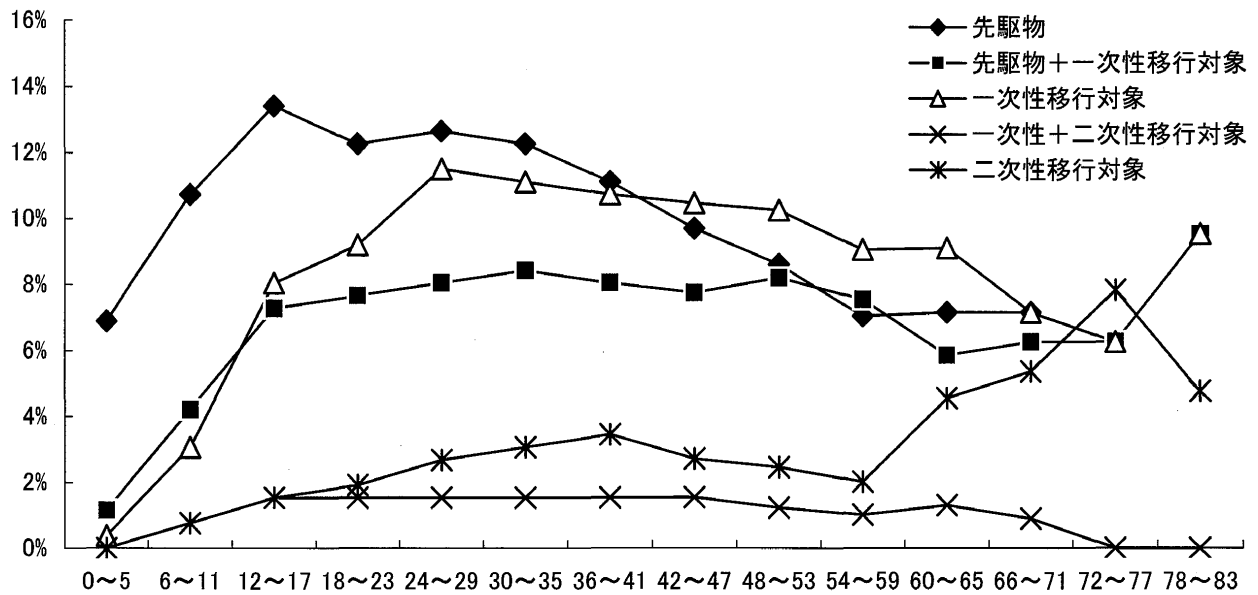


Figure 3 各対象物の発達時期ごとの出現率の推移 (出現頻度/被調査児数)

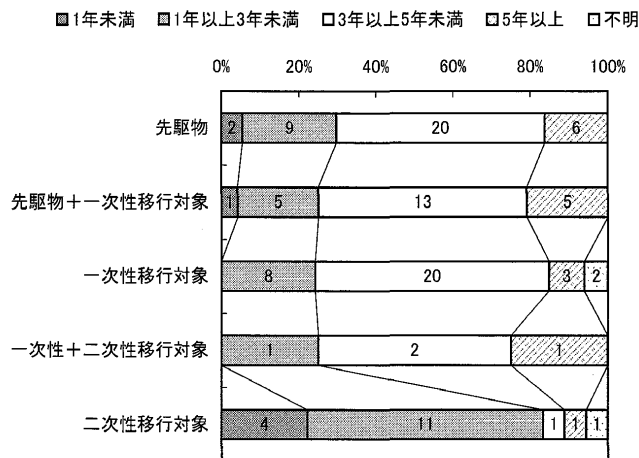


Figure 4 各対象物の出現開始からの継続期間

66~71ヶ月112名, 72~77ヶ月64名, 78~83ヶ月21名となる。そこで、各時期における各対象物の出現率の推移を正確に把握するため、各時期の出現数を各時期の被調査児数で除算した結果をFigure 3に示した。

Figure 3から分かるのは、各対象物の出現率は乳幼児

期を通じて減衰していくものの、それは急速なものではなく極めて緩やかなものということである。もちろん、対象物によって差異があり、先駆物は3歳を過ぎた頃からの減衰が目立つが、それでも5歳以降でも一定程度残存していることが分かる。一次性移行対象は5歳を過ぎたあたりの減衰が少し目立つが、やはり急激なものではない。逆に増大したものとして、二次性移行対象があげられる。これは3歳頃に一度緩やかに上昇した後、5、6歳頃に大きく上昇している。

では、各対象物は出現してからどのくらいの期間継続して現れるのか。Table 3とFigure 3は、各時期の出現頻度と出現率を明らかにしたものに過ぎないため、その継続の程度は一見明らかであるように見えて、実は明らかではない。そこで今回は消失時期(現在継続時期)の月齢から開始時期の月齢を減算したものを出現期間として算出し、それを1年未満、1年以上3年未満、3年以上5年未満、5年以上、不明のいずれかに分類した。

Figure 4は各対象物の出現開始からの継続期間を示したものである。Figure 4から、二次性移行対象を除く対象物は、いずれも3年以上の長期間にわたって愛着を維持されていることが分かる。1年持たず消失したケースはまれであった。この結果について、3年未満群と3年以上群に分けて5（対象物）×2（継続期間）の $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差が確認された（ $\chi^2(4)=21.741, p<.01$ ）。二次性移行対象は他の対象物に比して、3年未満の継続期間のケースが多いことが示された（ $p<.01$ ）。

もちろん、二次性移行対象の継続期間が短いのは、それ自体の出現が遅いこととも関連している。先ほど示したように、その出現のピークは3歳頃と5、6歳頃というように、他と比べて遅い。仮に3歳で出現したとしたら、3年以上と答えられる者はわずかなのだ。しかし、その一方で、現在継続中との回答と過去に出現で現在消失との回答の比率が、他の対象物の場合と同程度であることにも注目すべきであろう。二次性移行対象のみをあげた18名のうち、現在継続中は12名、過去に出現で現在消失は6名であり、他の比率と同等であった。また、1年以上3年未満に分類された11名のうち6名は、実質2年未満に該当した。こうした点からも、やはり二次性移行対象は比較的短い期間で消失に至ることが推察される。

こうした結果の解釈には、先行研究の知見が手がかりを与えてくれる。Hong（1978）によれば、一次性移行対象は生後7～12ヶ月頃に愛着が生じ、接触欲求や分離不安などとの関係において重要な役割を果たすのに対し、二次性移行対象は2、3歳頃に愛着が生じ、自律性や自立などとの関係において重要な役割を果たすと考えられるという。この点をふまえて考えると、二次性移行対象の出現のピークが3歳頃と5、6歳頃というのも納得がいく。なぜならちょうどその頃は、自我の芽生えの時期であり、“こうなりたい自分”をぬいぐるみや人形との関係の中で創り出すことによって満足したり、あるいは年下のきょうだいの誕生に遭遇して、親との関係の中で寂しさを感じたり、甘えたいけど我慢しなくてはならないという抑制を多く経験する時期と推測される。そのような時期にあって子どもを慰め、困難な現実と何とか向き合うことを可能にさせてくれる役目を、一時的である

にせよ、二次性移行対象は担ってくれているのかもしれない。このように移行対象は、乳幼児期の子どもの成長・発達を考える上で大変興味深い問いを投げかけてくれるのである。

### 3. 出現状況と出現理由

移行対象や指しゃぶりをする子どもは、それをどのようなときに必要とするのだろうか。Table 4は、保護者の自由記述（質問8）のうち主な項目をとりあげ、その出現頻度をまとめたものである。何人かの保護者は、出現状況として複数の項目をあげた。従って、各セルの該当者は排他的ではない。百分率は出現あり回答者116名を母数として算出した（以下、同様）。Table 4に示すように、保護者の大部分は移行対象・指しゃぶりの出現状況として入眠・出眠時をあげた（85%）。次いで、テレ

Table 4 移行対象・指しゃぶりの出現状況

	人数	%
入眠・出眠	99	85%
テレビ視聴	16	14%
情緒不安定	12	10%
退屈	12	10%
外出	11	9%
遊び	10	9%
その他	9	8%
不明	0	0%

Table 5 移行対象・指しゃぶりの出現理由

	人数	%
情緒安定性	42	36%
対象物の魅力	25	22%
授乳の問題	21	18%
親の不在	15	13%
理由不明	15	13%
先行する習慣	13	11%
生得性	8	7%
遺伝性	6	5%
きょうだいの誕生	4	3%
近接性	4	3%
遊び相手の不在	3	3%
空腹	3	3%
抱き時間の問題	2	2%
その他	8	7%



ビ視聴時、情緒不安定時（不安、怒られて泣く、悲しい、困ったなど）、退屈時（ぼーっとしている時、手持ちぶさたの時など）、外出時、遊びの時間がそれぞれ10%前後であった。これらはいずれも先行研究で指摘されている出現状況と一致する。

では、なぜ彼・彼女らは移行対象や指しゃぶりを必要とするのであろうか。Table 5は、保護者の自由記述（質問9）のうち主な項目をとりあげ、その出現頻度をまとめたものである。これらはいくまでも保護者の解釈による出現理由であるが、以下にそれぞれの事例を簡単に列挙しておこう。波線部は各項目への同定箇所であり、波線の後の〈 〉内がその項目である。

〈事例1〉0歳0ヶ月から3歳4ヶ月まで、母親の唇を触りながら指しゃぶりをして就寝。／産まれてからすぐの癖なので〈生得性〉分かりません。唇を触るのは、私がそばにいることを確認する安心材料だったような気がします〈情緒安定性〉。

〈事例7〉1歳0ヶ月から4歳6ヶ月現在まで、指しゃぶりと大きなクッションへの愛着。／指しゃぶりはぼーっと何もしていないとき、眠るとき。クッションも同様。また、他の子がクッションを使うと怒ります。／指しゃぶりは母乳があまり出ないと分かっていたのに、意地になってミルクと混合にせずに母乳にこだわったため〈授乳の問題〉と思う（3ヶ月くらいまで）。お腹がいつも空いていたせいかな？〈空腹〉クッションは子どもを抱く時間が他の子よりも少なかったため〈抱き時間の問題〉。／4番目の子なので他の子に忙しく〈親の不在〉、抱き心地のよいクッションが居心地のよい場所となったのかもしれません。子どもの思うに任せています。

〈事例18〉1歳0ヶ月から3歳8ヶ月現在まで指しゃぶり、2歳6ヶ月から現在までタオルや服のタグへの愛着。／不安なとき、退屈なとき、眠たいとき、緊張しているとき、怒られてひどく泣いたとき。指しゃぶりをすると落ち着いてくる様子〈情緒安定性〉。／タオルや服のタグは弟を妊娠、出産したことによるのではないか〈きょうだいの誕生〉と思う。指しゃぶりは寝るときの添い乳（寝ながらおっぱい）をやめたから〈授乳の問題〉かなあ

…と思う。

〈事例30〉1歳6ヶ月から4歳7ヶ月現在まで、枕への愛着と指しゃぶり。／はじめは羽毛の弾力のある枕の角にすごく執着して、暇があればその枕の角を目に入れたり足の裏でさすったりしていました。そのうち指しゃぶりも始まりました。／いつだったか「なんで指しゃぶりをするの？」と聞いたとき、「寂しいから」と娘が答えてくれました〈情緒安定性〉。父は帰りが遅く、娘を布団に寝かせて後片付けや明日の準備をしたりしていたので寂しかったのだと思います〈親の不在〉。

〈事例34〉1歳2ヶ月から5歳4ヶ月現在まで、毛布とぬいぐるみとおくるみへの愛着。／寝るときは必ず布団と一緒に並べて寝る。ないと探し回る。／赤ちゃんのとき、泣いたりするとそのぬいぐるみを抱っこさせたり、その毛布でくるんで抱っこして寝かせつけたりしていたためだと思う〈先行する習慣〉。

〈事例48〉0歳7ヶ月から5歳2ヶ月現在まで、おくるみへの愛着。／赤ちゃんの頃のおくるみなので、ずっとそばにある感じ〈近接性〉です。寝るときに抱いて寝ます。洗濯をしたときは濡れていても触りたがります。／小さな頃からなので、どうして持つようになったかは分かりません〈理由不明〉。ただ、においだと思います〈対象物の魅力〉。2,3歳の頃はよくにおいをかいでいたので。

〈事例74〉0歳4ヶ月から3歳10ヶ月まで、下唇をかむ。／最初は歯が生え始めてきて気持ち悪いのかと思いましたが、かむことによって落ち着くというか安心するような感じ〈情緒安定性〉がしました。／そのうち癖になって一日中かんで、寝るときもかんでいたので、寝てる隙にはずしてあげました。／なぜ下唇をかむようになったのかは分かりません〈理由不明〉が、指しゃぶりの代わりではないかと思えます。3歳になった頃から注意していましたが、なかなか治らなくて、入園前に自然としなくなりました。

〈事例91〉3歳0ヶ月から3歳8ヶ月まで、ぬいぐる

みへの愛着。／ちょうど4人目の妊娠が分かったときに、いつも検診に行くときだけ持っていた。出産後は嘘のように持ち歩かなくなった。／弟か妹ができることを本能で知って、ちょっぴり背伸びしたかったのかな？（きょうだいの誕生）検診中も大事そうに持っていたし、ナースにも見せていた。お兄ちゃんになることに自信を持ちたかったのか、それともぬいぐるみを私と思っていたのか（その他）、本人に聞いたことがないので分かりません。

〈事例112〉 2歳0ヶ月から4歳0ヶ月現在まで、指しゃぶり。／普段はまったくないが、怒られ泣き出し甘えるときは、指が口に入る。怒られているときなので、「手は口から出す。それからどうするの」と怒り、謝るまで待ち、謝れば別に指をくわえることについては言いません。／自分が本当に悪いことをしたと自覚が始めた頃だったと思います。悪いことをして怒られても、どうしても謝りたくなくて、それが甘えに変わって、しかし、親が甘えることを許さないとき、指を口に入れることでその気持ちを押さえようとしているのではないかと思います（その他）。

#### 4. 受容と理解

子どもたちの移行対象への愛着や指しゃぶりを、保護者はどのように受け止め、理解し、対応しているのだろうか。基本的に、先の出現状況や出現理由と比べると、保護者はこの点について多くを語ってくれなかった。そのため、相対的に多く資料が集まった次の観点にのみ焦点を絞って、出現頻度をまとめてみた。その観点とは、移行対象への愛着や指しゃぶりを、多少無理してでもやめさせるべきだと考えているか、あるいは子どもが自然にやめるようになるのを待つべきだとかがえているか、である。もちろん、こうした問題は単純な二分法で分けられるものではない。両方面の間には折衷案ともい

うべきいくつかの中間的な意見も出された。Table 6は、その受容と理解の方向性を5つに分けて、その出現頻度をまとめたものである。

最も多く見られたのは、移行対象への愛着や指しゃぶりを無理にやめさせない方向である。以下にいくつか事例をあげよう。

〈事例10〉 1歳0ヶ月から4歳1ヶ月現在まで、指しゃぶり。／4歳になったとき、「4歳さんだからやめる」と本人は言ったが、やはり眠いときには無意識にしているようである。今のところ無理にやめさせようとはしていない。様子を見て「やめてみる？」という程度に声をかけている。

〈事例83〉 1歳7ヶ月から4歳5ヶ月まで、毛布への愛着。／家族としてはそれがあれば落ち着くのなら…という気持ちでいた。最近自然になくても眠れるようになった。また、毛布を見たら寝る時間ということが分かっていたようだ。

〈事例48〉 0歳7ヶ月から5歳2ヶ月現在まで、おくるみへの愛着。／5歳になってから少しずつ洗濯も我慢できるようになりました。特に絵本の「ジェインの毛布」を読んでからです。いつかはさよならをするというのが分かったみたいです。「もー」と読んでいるこのおくるみは、子どもの宝物として家族でも大切にしています。

事例10では、「やめてみる？」と声かけはしているが、基本的にはその子が自然にやめるようになるのを待っているようである。事例83も同様に、家族はその子にとってのその対象物の意味を理解し、意味があるうちはそのままにしておく方がよいと考えているようである。また、子どもにとってその対象物はある種しるしのようなものではないかとも考えている。事例48では、家族は絵本「ジェインの毛布」を読んで聞かせ、いつか自分でさよならするだろうと子どもに語りかけ、子ども自身もそれによって、自分とその対象物との関係をより具体的に理解できた様子である。

次に、やめさせる方向の事例を紹介しよう。

〈事例18〉 1歳0ヶ月から3歳8ヶ月現在まで指しゃぶり、2歳6ヶ月から現在までタオルや服のタグへの愛着。

Table 6 移行対象・指しゃぶりへの受容と理解

	人数	%
無理にやめさせない方向	24	21%
やめさせる方向	9	8%
時が来ればやめさせる方向	5	4%
緩やかにやめさせる方向	3	3%
過去の経験をもとに待つ方向	1	1%

／なるべくやめさせたいので、「やめなさい」とか「恥ずかしいよ」といっている。

〈事例78〉0歳6ヶ月から4歳5ヶ月現在まで、指しゃぶり。／テレビを見ているとき、寝るとき、集中していないとき。手を軽くたたいたり、注意したりするが、すぐに指しゃぶりをする。キズテープを貼ったり指に絵を描いたり、いろいろやっただけ治らなかった。

両事例ともに、家族はなるべくそれをやめさせたいと考え、言葉で直接的にやめるようにと言っている。事例78ではそれに加え、手を軽くたたいたり、しゃぶる指先にテープを貼るなどしている。しかし両事例ともに、そうした取り組みは現在まで効果を発揮していないようだ。

次に、時が来ればやめさせる方向と緩やかにやめさせる方向を見てみよう。

〈事例66〉1歳0ヶ月から6歳5ヶ月まで、毛布への愛着と指しゃぶり。／家族(私と夫)は1年位前から「1年生になるし、やめたほうがいい」と言っていますが、なかなか難しいです。

〈事例1〉0歳0ヶ月から3歳4ヶ月まで、母親の唇を触りながら指しゃぶり。／3歳を過ぎてやめさせようと思ひ、両手を握って気を紛らわせながら寝かせつけていたら、1ヶ月くらいで自然にしなくなった。

〈事例95〉0歳1ヶ月から2歳6ヶ月まで、おしゃぶりへの愛着。／おしゃぶりをやめさせようとしたときは、あやしたり、他の玩具で気をそらしたりしていた。

事例66は、家族は子どもが小学校に入学する前に、それをやめさせた方がよいのではないかと考えている。似たような例として、「入園前には」「3歳になったら」などが見られた。発達の一つの節目を境に、何とかそれとお別れさせる方法を、家族は模索しているのである。事例1と95では、家族は子どもに言葉で直接的にやめるように言うのではなく、寝てる間に何らかの方策を講じたり、気をそらしたりして、子ども自身が気づかぬうちにそれとお別れするよう仕向けている。

以上のように、子どもによる対象物への愛着や指しゃ

ぶりを目の当たりにして、保護者は実に様々なことを考えるが、本研究で集められた自由記述を見る限り、無理にでもやめさせたい、あるいはそうすべきだと考えている保護者は、相対的にずいぶん少ないようだ。保護者の多くはそれを子どもにとって必要なことと考え、子どもなりの意味に対して理解を示し、子どもが自然とそれを手放すまで見守ろうと考えている。一方で、それが永遠に続くことも望ましくないことを理解している。それゆえ、保護者によっては子どもが気づかぬようそれを遠ざけたり、気をそらしたり、あるいは時期が来たらやめようねと、親子の対話の中で子ども自身に自覚を促そうとしたりするのだ。

また、移行対象や指しゃぶりの出現は、保護者によっては自らの子育てや子どもへの接し方を見直す機会を与えてくれるようだ。保護者にとっては保護者なりの理由があつてのことではあるが、親と子の間に現れた第三者ともいべきその対象物は、それまでの親子関係にいったい何を訴えかけているのかと悩み考えたとき、親子関係の中でそれまで見えなかったものも見えてくるのかもしれない。最後に保護者によるそのような記述を紹介して、本論文を締めくくりにする。

〈事例211〉3歳0ヶ月から4歳0ヶ月まで、シャツへの愛着。3人きょうだいの3番目の男児。／テレビを見ながらシャツをかんでいました。一時的なもので、やっていた時期が2回ありました。やらなくなったと思っていたら、何ヵ月後かにまたやり始めました。両方とも1ヶ月の間だったと思います。／その2回とも時期は、やはり自我の強い時期だったように思います。手のかかる子どもでもあったし、3人の子育てで大変だったので、育児に余裕のない時期で、私のほうも子どもに対して考えの足りない部分もあったように思います。／余談ですが、一番上のお姉ちゃん(10歳)は指しゃぶりなどなかったものの、その代わりにいまだに人の耳を触る癖があります。特に自分が寝ようとするときにひどく出ます。4歳にして二人の妹・弟のお姉ちゃんになって、あまり甘えられなかったのではと、耳を触ってくるたびにその子に対して悪いなという気持ちでいっぱいです。こういう症状はやはり寂しさの表れなのでしょうか？もつともつと余裕のある子育てをしたいと思います今日この頃です。

## 文 献

- Busch, F., Nagera, H., McKnight, J., & Pezzarossi, G. 1973 Primary transitional objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 12, 193-214.
- 遠藤利彦 1989 移行対象に関する理論的考察：特にその発現の機序をめぐって 東京大学教育学部紀要, 29, 229-241.
- 遠藤利彦 1990 移行対象の発生因の解明：移行対象と母性的関わり 発達心理学研究, 1, 59-69.
- 遠藤利彦 1991 移行対象と母子間ストレス 教育心理学研究, 39, 243-252.
- Gaddini, R., & Gaddini, E. 1970 Transitional objects and the process of individuation. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 9, 347-365.
- Hong, K. M. 1978 The transitional phenomena: A theoretical integration. *Psychoanalytic Study of the Child*, 33, 47-79.
- Hong, K. M. & Townes, B. D. 1976 Infant's attachment to inanimate objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 15, 49-61
- Horton, P. C., Louy, J. W., & Coppolillo, H. P. 1974 Personality disorder and transitional relatedness. *Archives of General Psychiatry*, 30, 618-622.
- 藤井京子 1985 移行対象の使用に関する発達的研究 教育心理学研究, 33, 106-114.
- 井原成男 1996 ぬいぐるみの心理学：子どもの発達と臨床心理学への招待 日本小児医事出版
- 井原成男・汪玲・庄司順一 1997 移行対象と気質の日中比較 日本教育心理学会第39回総会, 170.
- 池内裕美・藤原武弘 2004 移行対象の出現・消失に関する社会心理学的規定因の検討：生育環境と夫婦間ストレスの視点から 社会心理学研究, 19, 184-194.
- Litt, C. J. 1986 Theories of Transitional Object Attachment: An Overview. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 383-399.
- 村瀬聡美 2001 小児のライフステージと心の健康：心理的問題とその対応 若林慎一郎・本城秀次編 精神保健 (pp.87-132) ミネルヴァ書房
- Provence, S. & Ritvo, S. 1961 Effects of deprivation on institutionalized infants: Disturbances in development of relationships to inanimate objects. *Psychoanalytic Study of the Child*, 16, 189-204.
- Stevenson, O. 1954 The first treasured possession. *Psychoanalytic Study of the Child*, 9, 199-217.
- ウィニコット, D.W. 1979 遊ぶことと現実(橋本雅雄訳) 岩崎学術出版 (Winnicott, D. W. 1971 *Playing and reality*. London: Tavistock Publications.)
- Winnicott, D. W. 1953 Transitional Objects and Transitional Phenomena. *International Journal of Psychoanalysis*, 34, 89-97.

## 付 記

本研究は、岡田朱里・河内美由紀・三好裕子の3名が山口芸術短期大学保育学科「こども総合研究」(平成14年度)において実施し採集したデータに、著者が新たにデータを加え、再分析したものである。調査にご協力いただいた保育園の先生方、園児および保護者のみなさんに心より感謝いたします。